

2022年6月24日神戸市ランドマークで観察した植物

作岡田弘

カゴノキ（鹿子の木） クスノキ科ハマビワ属

関東地方・福井県以西～九州、暖地のタブニキ林やシイ林に混生する常緑高木、高さ22mほどになる。樹皮は灰黒色で、樹皮が丸い薄片となって剥がれ落ちる、その剥がれた跡が鹿の子模様になるので「カゴノキ」と名前の由来となった、雌雄異株、材は淡い赤味を帯びる硬質で微密であるので、床材、建築材、楽器、など様々な用途に用いられている、特殊な用途として鼓の胴として使われている。



イチヤクソウ（一葉草） ツツジ科イチヤクソウ属 *花期=6～7月

名前の由来=イチヤクソウ一つで多くの病気に効く薬であるところから。北海道～九州の林内に生える、葉は根際を集まって付き、長い葉柄がある、円形または長楕円形、花は葉の間から20cm位の花茎を立て上部に2～10個の白い花を付ける。菌根植物ですので毛根が発達せず菌類と共生することにより栄養を得て成長するので、栽培は難しい。薬効=全草、乾燥させたものをロクテイソウ（鹿蹄草と呼ばれる、アルブチンと呼ばれる配糖体が約1%含まれており、尿路の殺菌、消炎、利尿作用、がある、膀胱炎や尿道炎の薬とされ泌尿器科で非常に多く使われている、又、タンニンを含んでいる。炎症やタダレの痛みを和らげる、細菌の繁殖を抑える、小血管壁に直接働き止血させると言う、数々の優れた薬効があります。その他にも数々の薬効があると言われている。花言葉=恥じらい



ムラサキシキブ（紫式部） シソ科ムラサキシキブ属 *花期=6月

古くは「ムラサキシキミ」と呼ばれていた、「シキミ」とは、「重なる実」のことで沢山実を付けるという意味を持つ言葉です、紫色の実を沢山付ける様子から「ムラサキシキミ」と呼ばれていたが、その名前が平安時代の作家「紫式部」と似ているために「ムラサキシキブ」となった。*花言葉=愛され上手 聡明・上品、9～10月頃に紫色の実を付けるので庭木として人気がある、赤い実を付ける木は多いが紫色はないので、実を多くつける「コムラサキ」は園芸用として改良されたものです。山野にもう一種類「ヤブムラサキ」がある、実が少ない、葉の両面に柔い毛が密生、ビロード感触



コマツナギ（駒繫） マメ科コマツナギ属 *花期=7～9月 8/17の誕生花

背が低いので（6～90cm）一見草の様に见えますが、れっきとした落葉低木です。

名前の由来=茎が丈夫なので馬を繋止めておくことが出来るから、と言う説。木の葉を馬が好物でこの木から離れなくなるので、という説がある。原産地はアフリカ、花はマメ科特有の蝶形花、葉は1cm程の楕円形、一つの茎に10枚前後の葉を付ける奇数羽状複葉、葉や花は若苗のころは食べることが出来る、揚げ物やお浸し。*花言葉=希望を叶える



カワラマツバ（河原松葉） アカネ科ヤエムグラ属 *花期=7～9月

名前の由来=日当たりの良いやや乾燥した河原や道端に生え、松葉の様な細い葉を付けていることから。在来種で北海道～九州に分布、ヤエムグラ属の茎の断面は四角が多いが、本種は珍しく茎の断面が丸い。葉は線形で5～10個輪生花は白色で基部から4裂し平開する。昔、ギリシャではチーズを作る際、牛乳を凝固させる際にこの草を用いたと言われる本種の白色のカワラマツバはキバマカワラマツバの変種だと言われる。*花言葉=活発



アカメガシワ（赤芽柏） トウダイグサ科アカメガシワ属 *花期=6～7月

名前の由来=新芽が鮮紅色であること、葉が柏の様におおきことから、柏が生育していない地域では、この葉を柏の葉の代用として柏餅を作ったことからアカメガシワと呼ぶようになったと言う説がある。雌雄異株の落葉高木で寒さに弱く日当たりを好んで生育し成長が早い、下部の葉程葉柄が赤く長いので、太陽光お受け、光合成する植物の知恵を学ばせるために子供たちへの学習に利用している、典型的なパイオニア植物で、森林が伐採されたり火災にあうと、いち早く発芽繁殖する、これは種子が高温にさらされ発芽しやすくなる性質がある、薬効は日本薬局方に記載の生薬、樹皮は野梧桐（やごとう）葉は（やごとうよう）と言う、葉は夏に乾燥、樹皮は秋に採取して細かく刻み乾燥、煎じて胃潰瘍他に

